

美術科教育学会通信 53

2004年6月1日発行

事務 / 通信 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室 柴田和豊宛

Tel. / 042 (329) 7608 Fax. / 042 (329) 7599 (柴田直通)

Tel. / Fax. 042 (329) 7594 (相田直通)

E-Mail. /kshibata@u-gakugei.ac.jp (柴田) /aidaman@u-gakugei.ac.jp (相田)

新代表理事挨拶

はしもとひろゆき
橋本泰幸(鳴門教育大学)

この度、代表理事に就任いたしました、鳴門教育大学の橋本泰幸です。

3月28日の広島大学での学会総会では、機会がございませんでしたので、この紙面を借りてみなさまにご挨拶を申し上げます。

ご承知のように、現在、学校教育は大学を含めて改革が強く求められております。

小・中学校など初等・中等教育の諸学校では、教育課程や教育内容の見直しが求められています。不登校や「むかつく」「キレル」子ども、「心の問題」を持つ、あるいは問題行動をとる子ども、さらに、そのような子どもたちの低年齢化など、多種多様な教育課題が多く発生しています。

大学についてみれば、明治以来の国立大学はこの4月から法人化され、どの大学でも制度や組織の再編、見直しなどにおわれているのが現状です。しかし、大事なことは大学においても学生の教育の問題です。

美術科教育学会は美術教育に携わる研

究者および実践者による研究交換の場であり、研究を深める場であります。本学会での研究成果が現在の教育界が抱えるすべての問題に応えることはできないものの、少なくとも美術教育という視点からの改善・改革には応えなければならないであろうし、また応える義務を持っていると考えます。

学会の大きな事業としては大会開催、学会誌の発行、美術教育研究の拡大や啓蒙を使命とする東地区、西地区での研究会の開催、そして会員による部会活動の支援があります。

本学会は決して規模の大きな学会ではありません。その点にたてば会員獲得は第一の目標になりましようが、私はむしろ研究活動とその成果が教育界の要求に応えられるという意味での充実を目標にあげたいと考えます。毎年の大会、学会誌、そして各部の研究活動が、教育課題に応えられるものであることが必要です。それによって会員も集まり学会活動の充実へと展開すると思えます。

本学会は昭和56(1981)年、大学美術科教育研究会として発足以来、着実に発展してきました。そこには草創期の大勝恵一郎、鈴木寛男両先生、近くは代表理事を務められた宮脇理、花篤実両先生、そしてこの四先生の他に、多くの諸先生、諸先輩の学会に対するご尽力がありました。この度、本学会代表理事を引き受けることになりましたが、先ずはこの着実な歩み

を継続させることが大きな責務であると
考えております。

そこで、学会運営につきまして、副代表
理事に東京学芸大学の増田金吾、兵庫教
育大学の福本謹一、学会誌委員長に和歌
山大学の永守基樹の三氏をお願いいたし
ました。また、学会事務の統括的作業は鳴
門教育大学で行うこととし、その代表責
任者は山木朝彦氏に担当してもらいます。
その他の学会活動の役員には、新理事の
方々をお願いすることになりますが、そ
の分担につきましては次号の「学会通信」
でお知らせいたします。

学会は会員のみなさんの研究活動が活
発に展開するとき、その役割を果たして
いるといえます。情報交換を通してお互
いの研究と実践を深めることにより、学
会を様々な教育課題に応える、つまり「社
会に応える場」にしようではありませんか。

* * *

ありがとうございました

学会代表理事 柴田和豊

3月の学会総会で橋本泰幸先生(鳴門教
育大学)が、新代表理事として選出されま
した。それとともに、私は8月の定例理事
会まで残務をこなし、退任することとな
りました。私の場合、何らかの形でこの約
15年間つねに学会の執行部に関係してき

ました。そのために、代表を務めさせて頂
きましたこの3年間は、正直いってモチ
ベーションを保つのがたいへんでした。
何ごとも長くなることはよいことではあ
りません。そんな私が大過なく任期を終
えることができますのも、宮坂副代表理
事、藤江副代表理事、長田学会誌編集委員
長、各役員の方々、ただひとりの事務局員
だった相田さん、それに学会員の皆様方
のご協力のおかげです。本当に感謝して
います。ありがとうございました。

学会の新体制につきましては、フレッ
シュな橋本新代表理事のもと、活力あふ
れる布陣が敷かれるものと、安心をして
います。ですが、学会の未来に関しまして
は、教育を取り巻く状況との関係でどう
なっていくのかという、いささかの不安
を感じています。明るい話題の少ない現
実は私たちを萎縮させていきます。それ
に向かう熱を学会が掻き立ていかねば
ならないのですが、そのことについて明
快な展望を持ちあぐねているからです。
しかし一ついえることは、私たち一人ひ
とりが美術と教育の問題について慌てず
騒がず考えを深めていく以外に、よき方
法はないということでしょう。ですから、
学会が私たちを元気づける場であり続け
ることを、祈らずにはおられません。

最後に事務的な連絡をさせていただきます。

8月末までは学会事務は現事務体制で行
います。従いまして、各種問い合わせは、
これまで通り、この通信の上段に記載の
アドレスまでお寄せ下さい。

学会誌への投稿につきましては、追っ
て新学会誌編集委員会から案内が送られ
る予定です。しばらくお待ちください。

* * *

広島大会を終えて

広島大会事務局

■「実行委員長ッ！大変です！参加会員皆無ですッ！」との悪夢にうなされたことを今は懐かしく思い返している。■「美術教育の今をみつめて



～実践と理論の統合～」とは広島大会のテーマであった。成果の有無。お気楽実行委員長某の判断は「有」。■学会終了後、兵庫教育大学の福本謹一先生から「発表会場A」で取材



した「非学会員・現職教員」の発表をインターネット上で紹介するとのご連絡。もう一件、この学会に「非学会員・現職教員」として参加のあった小学校の先生からの連絡。「保護者参観日の図画工作科の授業で画家岩下哲士氏のことを扱いたい。ついてはVTR、作品資料等の支援がほしい」とのこと。さらにもう一件、シンポジウムの際、フロアーから「実践と理論の統合」を問うことの意味を問う発言があったこと等々。これが「有」の根拠。■くぐぐと「実践と理論の統合」について屁理屈を捏ねるつもりはもとよりない。一つ一つの確かな営みをきちんと積み上げていくことこそ肝要。悪夢にまで悩まされた学会開催ではあったが、このことを再確認できた幸せをいまかみしめている。感謝！

(実行委員長：若元澄男)

お陰様で総数200名を超える参加を得ることが出来ました。法人化直前のバタバタした時期であったことに加え、例年より1週間程度早い日程であったために様々なことが周知できなかったことが不安のタネでしたが、何より皆様のご支援を頂いたお陰と心より感謝致します。代表の柴田和豊先生からは、開催大学の裁量を最大限認めていただきました。シンポジウムの宮脇理先生、花篤實先生、永守基樹先生、山木朝彦先生には、大阪で事前に検討会を持って頂き、大会当日には大会テーマを明快に解きほぐして頂きました。講演を頂いた藤田尚男先生、鼎談をして頂いた岩下哲士氏とお母様には、魅了するお話を頂きました。宮坂元裕先生と赤木恭子氏からは、横浜大会開催時の膨大な資料を貸していただきました。参加して頂いた学会員、非学会員の皆さま、学生スタッフ、また今回は参加頂けなかったけれども関心を持って見守って下さった総ての方に感謝致します。

(事務局：三根和浪)

今回、大会運営委員として学会に携わることを通して、研究発表の場としてのみではなく、教育の場としての大会の意味を改めて認識した。大会においては、本学から学部生、院生、卒業生を含めて45名がボランティアの学会補助員として参加した。本学における大会開催の重要な意味の1つには、美術科教育の研究分野を開拓されておられる諸先生方と若い学生達との直接的な交流が挙げられる。学生達にとって、日頃、論文のみで知っている先生方とお会いして、親しくお話できる機会をもてたことは、今後、美術科教育を勉強する上で大変な刺激になったと考える。そして、これから学会活動に積極的に参加することを鼓舞するよい機会になったのではないだろうか。時間を惜しまずに、学会開催中のみでなく学会終了後、好意的に学生達とかかわっていただいた諸先生方に改めて心よりお礼を申し上げたい。

(事務局：中村和世)

広島大会シンポジウム
「実践と理論の統合」をめぐって
～問題の＜浮上史＞とアーカイブ」報告

■ 報告(1) ■

永守基樹(和歌山大学)

広島大会2日目(3/20)にサタケメモリアルホールにて大会シンポジウムが行われました。パネラーの一人として報告いたします。

パネラーは、宮脇理(元・筑波大学・元美術科教育学会代表理事)、花篤實(大阪芸術大学・元美術科教育学会代表理事)、山木朝彦(鳴門教育大学)、永守の4名。司会は三根和浪(広島大学)が担当されました。

「実践と理論の統合」という今大会のシンポジウムのテーマは、教科教育学の一領域である美術教育学にとっての根本的な課題でもあり、教育学全体にとっての古典的な課題でもありましょう。考えようによっては、いまだに本テーマが我々にとってプロブレマティックである状況自体が問題であるのかもしれない。

とは言え、さして長い歴史を持つわけではない本学会でも、少なくない論議が本テーマに関連して行われてきました。『学会20年史』などに目を通せば、本学会設立当初の目標は「教科教育学としての美術教育学の学的確立」であったことは明らかですが、同時にその学の確立が単純な理論的整備によって可能になるわけではないことも自明でありました。

大阪大会での二十周年記念レイトーク「美術教育学の形成と課題」(1998)においても、学的形成に教育実践が如何に関わるかが常に問題になりましたし、また一連のリサーチ・フォーラム(1999-2001)では美術教育の諸ディシプリンが語られたにしても、それを支える実践性

が問われてきたはずですが。今回のシンポジウムはそのような一連の流れに位置づけられるべきものという意識の中で私は席につきました。

本シンポジウムは宮脇・花篤の「教員系修士課程設立世代」と、山木・永守という「修士第一世代」という2世代間での対話という性格を持っています。上の世代の現場や行政を含めた巾広い経験を、現場経験のほとんど無い下の世代が如何に受けとめて行くかが、本シンポジウムの隠された構造であったとも言えるでしょう。

宮脇氏の広い知見・視野と教科調査官としての経験、花篤氏の実践性とプロデューサー感覚は、それぞれの個人史の中で完結するものではなく、一種の生きたアーカイブとして学会員が共有すべき部分がありましょう。その中で、両氏の歴史がヴィヴィッドに戦後美術教育史とクロスしたいくつかのエポックを抽出し、美術教育における実践と言葉の典型的な問題として俎上に乗せたい…。これが私たちの目論見でありました。

民間美術教育運動体の実践とそれを支えた言葉群、そして指導要領という政治的性格の濃厚な言語体系と実践の関係性は、お二人の世代に語って頂くべきものでしょう。また造形遊びをめぐる「美術」「遊び」「身体」等の言葉の形成についても両世代で再検討するべきものに思えます。

当日は時間の都合上、不十分な論議となった部分もありますが、以下に予定されていたプロットを簡略化して示しておきたいと思います。

1. 問題の所在
 - a) 問題の浮上史
 - b) 問題の枠組み
2. 実践の理論の対立構造から
 - a) 「戦後美術教育史」が教えるもの
 - b) 臨床的アプローチをめぐって
3. 「造形遊び」の冒険
 - a) ケーススタディとしての「造形遊び」
 - b) アヴァンギャルディズムと美術教育
 - c) '70年代を振り返る

d) 言葉は生まれたか？

4. 実践的学への展望

a) 批評的言語の自覚から

b) 教科教育学としての検証—結論と
まとめ

5. 結び

最後ながら本シンポに企画の段階より
多大なご助力を頂いた広島大学のスタッ
フ諸氏に心よりの感謝を申し上げます。

■ 報告(2) ■

山木朝彦(鳴門教育大学)

1. 実践と理論の統合というテーマ

実践と理論の統合は高邁な理想主義が
掲げた目標として私たちを魅了するとと
もに、多くの実践には必ず理念が伴い、そ
の理念を支える理論的言説があるという
意味で、きわめて現実的な課題でもある。
統合という言葉をつきつきという意味で
捉えたとき、話はきわめて現実的なもの
となる。

高邁な理想主義としての実践と理論の
統合を語る前に、教育の世界で繰り返し
登場するこの永遠のテーマの現実的側面
を照射し、今後の教育実践と理念の策定
に活かしたいとするのが、今回のシンポ
ジウムのねらいであった。それがなぜ歴
史的な反省を伴うアプローチに繋がって
いったのか簡略に述べたい。

2. 思考の整理のための事例研究

振り返ると、テーマに含まれる実践と
いう概念として、教材の成立と実施を取
り上げる方針は早い段階で定まっていっ
た。理論の概念規定としては、普遍性を求
められる科学的理論ではなく、教材の成
立時に参照された思想的な枠組みや文化
的背景を含む言説の意味として理論とい
う言葉を捉えた。したがって、実践(教材)
のなかに含み込まれた理念としての言説
の誕生と有効性を問うことが私たちの課

題となった。

シンポジウムの後半に登場した「造形
遊び」という教材は、この課題に対するア
プローチのあり方を具体的に示すために
選んだ任意の対象に過ぎないが、教材の
登場と付随する言説、おおまかにいえば、
実践と理論の関係性を解明する好事例で
あったことも確かである。

アーカイブの必要性という認識にとつ
ても、「造形遊び」は切実な意味を持つ。な
ぜならば、わたしたちにとって、「造形遊
び」の登場は、必ずしも遠い過去ではな
いにもかかわらず、振り返ると背後が消
えていく梯子のように、その成立の契機
や理論的背景の記憶と記録が風化しつづ
めるからだ。視野の範囲に収まる程度に、
時代との時間的距離をわたしたちが獲得
し回顧する冷静さを持ち得たからこそ、「
造形遊び」は学的分析の対象となるとも
いえるわけだが、関連する資料の散逸や
記憶の衰弱が始まるという事実からも目
を背けることができない。

ここには、歴史を振り返るときに陥る
ジレンマがある。価値中立的な意識がな
ければ、対象となるテーマを冷静に批判
し分析できない。しかし、そのような冷め
た意識からは研究対象となる事象を生み
出した先人の熱い思想を掴み取ることが
できない。したがって、人を行動に駆り立
てた時代の精神をも見失うのである。

3. アーカイブの意味と必要性

アーカイブ、とりわけ映像のアーカイ
ブが巷間、話題になる一つの理由として、
現在の価値観をもって過去を無責任に総
括してしまう御都合主義を自戒するた
めに、過去の価値観がどれほど熱い支持
を得ていたのかを映像によってリアルに
検証し、今に至る発展の契機を、ある
いは惰性的形骸化に陥った道程を見つめ
直したいという知的な欲求を挙げること
ができる。シンポジウムのテーマとし
て、実践と理論の結び目を探ろうとす
る場において、アーカイブという言葉
を用いるとき、こ

うした現象と共通する批判精神を私たちは共有していたと思う。

具体的には、戦後の美術教育界の動向のなかから、「造形遊び」の登場までの背景となる事柄を宮脇と花篤に対して永守と私が質問し、語ってもらう形式でシンポジウムを企画した。宮脇は自ら翻訳をしたE. レッドガーの思想を軸に〈造形による遊び〉という認識と「造形遊び」の思想との漸近線を示し、花篤は「具体」に代表される戦後の前衛的美術運動と造形遊びとの結滞を教師の意識を検証する視点から指摘した。結果として、統合の理想を謳うお決まりの結論ではなく、実践と理論の乖離を含んだ結合の様態を歴史から炙り出すとともに、この教材を支える豊かな文化的背景を強調する結果となった。

歴史の検証には、多様な過去の分析と解釈が不可欠である。その意味で、会場から「造形遊び」の成立の契機となる最大の流れを明示して頂いた宮坂元裕先生に感謝します。那賀貞彦先生の批判に十分に答える時間が無かったのですが、ディシプリンをめぐる議論と今回のテーマの関係を今後も追究していきたいと思えます。

* * *

第26回 美術科教育学会 広島大会 総会報告

- 日時 2004年3月21日(日)
午後3時半～4時半
- 会場 広島大学 サタケメモリアル
ホール
- 議題

1. 研究部会の見直しについて

『学会通信』(No. 49)に研究部会の見直しに関して、既に、新井・岩崎理事から、進行予定も含めて、報告されていることを確認した。いくつかの部会からは、継

続、または一部、活動内容の事業部化などの申請がありますが、理事交代の時期をはさむため、今年の8月まで、各部会からの申請受け付けを延長することになった。申請書類は7月までに東京学芸大学の事務局まで。

2. 東西地区会の今後の進め方について

東と西とに別れて各地で実施されてきた地区会(研究会)の今後の進めかたに関して、現状どおり、東地区を宮脇理事、西地区を花篤理事に世話人として運営していく。

3. 事業部の設置について

事務局の組織を改正して、総務部、会計部、事業部の三つを設置する。事業部の活動内容については、学会公式サイト、学会誌のCD-ROM化など想定されるが、詳細は理事会で検討していく。

4. 2003年度決算について(含む監査報告)

同封の資料を参照。学会誌第25号刊行費の一部の未支出分もあるが、3月19日時点で決算した。

5. 2004年度予算案について

同封の資料を参照。基金を設け、積み立てを開始した。

6. 新役員の選出について

以下の理事、監事が承認され、橋本泰幸理事〔鳴門教育大学〕が新代表理事として承認された。

理事22名(50音順) 赤木里香子 新井哲夫 岩崎由紀夫 上山浩 岡崎昭夫 金子一夫 花篤實 柴田和豊 直江俊雄 仲瀬律久 長田謙一 永守基樹 橋本泰幸 福本謹一 藤江充 前村晃 増田金吾 水島尚喜 宮坂元裕 宮脇理 山木朝彦 山田一美

監事2名(50音順) 大橋皓也 浜本昌宏

7. 次期大会の開催について

千葉大学教育学部で開催する提案が承認された。

8. その他

『美術教育学』賞に関して質問・意見があったが、報告2の内容と関連させて議論

することにした。

○報告

1. 学会誌編集委員会からの報告

学会誌第25号の刊行については、諸般の事情で刊行時期が4月以降にずれ込む予定が報告された。

2. 学術会議関連の報告

学術会議会員の選挙、学会からの科研審査員の推薦、研究関連委員会などについて報告された。

3. 学会賞の選考結果についての報告

学会として賞を出すことの意義や問題点、賞の選考方法などについて質問があり議論した。そこでの議論を踏まえて、新理事会でも更に検討していくことにした。

4. 今年度の学会誌の書式、締め切りについては、同封の「投稿要領」をご覧ください。
(ふじえ)

教育が育む確かな学力」をフォーカスすればよいのか？

○テーマ：「美術教育が育む確かな学力」

○日時：2004年6月26日(土)13:00～17:00

○会場：福島大学教育学部共通講義棟 M-3
(JR東北本線金谷川駅下車、徒歩5分)

○内容：

(1) 講演

『表現の楽しさを味わう「みたて」からの教育実践』後藤楯比古氏
(神奈川県鎌倉市立御成中学校長)

(2) シンポジウム

『美術教育が育む確かな学力の視点』パネリスト

後藤楯比古氏、三浦浩喜氏、大石正文氏、五十嵐幸男氏

司会：天形 健

○参加費：500円(資料代含む)

○参加申込：福島大学教育学部

美術科教育研究室 天形健 宛

*FAX/TEL:024-548-8225

*メール：amagata@educ.fukushima-u.ac.jp

○懇親会：福島大学内レストラン

18:00～(参加費3000円の予定)

○宿泊等：各自手配して下さい。(JR福島駅周辺に宿泊施設が多くあります。会場の福島大学最寄の「金谷川駅」は福島駅から南に二駅です)

◎今回の講演をお願いした後藤楯比古氏は、昨年11月に横浜美術館子どものアトリエ

開設15周年記念に合わせ、横浜美術館で《校長先生はアーティスト・後藤楯比古の世界展》を開催されました。長く神奈川県の中学校やインド/デリー日本人学校長として美術教育を実践されながら、制作活動や出版活動に幅広く活動された方です。

◎福島の初夏のような気持ちになって、美術教育の元気を取り戻せる会になればと、準備をすすめているところです。ぜひ

今年度の東西の地区会開催のお知らせ

美術科教育学会第6回東地区会

〈フォーラム in 福島〉

テーマ：「美術教育が育む確かな学力」

宮脇 理(元筑波大学)

天形 健(福島大学)

教育の現在を背景にして、繰り返し登場するのが「学力」問題である。その焦点化に難渋するのは、教育概念の「ありよう・営為」が人間の生涯に拡散しているからであり、しかも視野を広げれば国民国家の現在にまで連鎖するからである。端的に言って、どこから、どのように「美術

多数の方の参加をお待ちしております。
(天形)

■補遺／(宮脇：当日配布資料の一部から)
教育の現在と密接に関わる国民国家の概念は、その初期から今も使われ続けているが、「現在」の国民国家のありようは、グローバリゼーションの最中に存在するのであって、夢想として出発した初期(共同体)の(国民国家の)概念とは大きな違いがある。

さて「国民国家とは何か」の定義を示すことは難しいが、近代(モダニティ)の特質として、とりわけ教育の目的、営為について語る時には、どうしても瞥見したいのが、ナショナリズム研究の新古典ともいべき書を顕した、中国生まれの「U・K」人にして人類学者ベネディクト・アンダーソンの有名な一節であろうか。(ベネディクト・アンダーソン著：『増補 想像の共同体・ナショナリズムの起源と流行／ネットワークの社会科学』：白石さや・白石隆訳(NTT出版：1997年)参照。……中略……)

学力の問題そして課題は、列強国家への仲間入りを目指した、官僚主導による明治維新の諸改革がみせた「学力」とは質的に異なるのが「学力観」の現在であり、温度差などの表現では顕しきれない……(後略)。

さて、今回に連鎖する美術科教育学会第7回東地区会は、宇都宮大学にバトンを渡します。美術科教育学会第7回東地区会<フォーラム in 宇都宮大学>として、2004年8月21日(土)に開催いたします。テーマは「日本の美術科教科書・美術教育文献資料のアーカイブ化に関する研究」とし、今後3年にわたる科学研究費補助金基盤研究を背景においた、宇都宮大学山口喜雄教授が主導する斯界・斯学のメタレベルを目指す研究会を行います。

* * *

「国際美術教育シンポジウム in 美濃」
(美術科教育学会第6回西地区会
<シンポジウム in 美濃>)

ふじえみつる(愛知教育大)

岐阜県美濃市の市制50周年事業と関連させて、アメリカからアンダーソン教授(フロリダ州立大)を招いて以下のような形で、国際シンポジウム(第6回西地区会)を開催します。多数の会員の方、会員以外で関心のある方の参加をお待ちしています。

お問い合わせは、岐阜大学の辻泰秀先生(TEL058-293-2277)までお願いします。

○日時：2004年8月17日(火)

9:50～14:50

○会場：岐阜県美濃市文化会館

美濃市45-3, TEL0575-35-0144

○内容：シンポジウム「鑑賞力・批評力の育成－美術教育と国際交流」〔仮題〕

9:00－9:40 開会行事

9:50－11:40 シンポジウム

トム＝アンダーソン教授、岐阜県学校教員、美術館関係者などが参加予定。

12:50－11:40

英語による美濃の作品紹介

13:00－14:50 分科会

(I) 国際交流 アンダーソン教授とともに－世界の美術教育

(II) 小学校 岐阜県小図研

(III) 中学校 岐阜県中美研

15:00～ 「うだつ」のあがる古い街並み見学(ガイド付き)

* * *

共同研究紹介
情報時代の学びに対応する新しい
メディア教材はできないだろうか？

茂木一司(群馬大学)

平成14～16年度まで「イメージ・感性開発のためのメディア活用型総合学習パッケージの開発—美術館等におけるワークショップ及び学習デザインの教材開発に関する調査・研究—」(基盤研究(B)(1), 課題番号14380095)と題する共同研究を、筆者を代表とする計9人で行っています。研究分担者は、福本謹一(兵庫教育大), 森岡祥倫(大阪成蹊大), 直江俊雄(筑波大), 原田泰(多摩美大), 永守基樹(和歌山大), 阿部寿文(大阪女子短大), 森公一(同志社女子大), 佐藤優香(国立民俗学博物館)で、美術教育の他、情報/メディア・アート/デザイン, 博物館研究/ワークショップ論などの多彩な研究者グループです。

研究目的は、・総合型マルチメディア型学習パッケージ, ・ワークショップ型学習環境デザインの方法論, ・イメージ・感性思考・認識のための感覚の拡張を目的としたテクノロジーを使ったメディア教材などの開発です。

情報通信ネットワークの時代を迎え、私たちは多様なメディアを使いこなし、また自身もメディアとして環境化していく世界の中で、従来型の知識技能型の教育から、21世紀のイメージ・感性重視型の「学び」に注目し、1980年代以降教育の総合化が進む中で、造形/美術教育(的な)学習+方法が時間・空間を限定しない新しい学びの場の創出を生み出すという理念に基づいて、コンテンツ+メソッド(教育内容と方法)が同時に提案できるような学習パッケージを制作・実践・評価し

たいと考えています。

従来、教育では教科書、教具やそこに内在する価値を(比較的スタティックな)教材としてきたが、この研究では人が学ぶプロセスや場そのものをデザインとして捉える、いわゆる「学習環境デザイン」のコンセプトに立ち、造形を中心として、テキスト、音声、映像、身体表現などを総動員した総合学習型のマルチメディア学習パッケージをつくらせたいと思っています。

そこで、私たちが注目したのが、博物館・美術館等で盛んに行われるワークショップなどの参加型学習です。平成15年度は、群馬大のフレンドシップ事業を使って、「(障害児のためのメディア・アート・ワークショップ)あさひdeアート」(於桐生・あさひ養護学校)を実施しました。苧宿俊文(NPO学習環境デザイン工房)氏のアドバイスの下、・苧宿「Tシャツで話そうねえ」、・森+真下武久「天鼓雷音+開敷華王」、・原田「小さな冒険:トリの目アリの目」、・森岡「音のキャッチボール・ゲーム」の4つのメディア・アート・ワークショップです。

詳細は省略しますが、当初のねらいはハイテクメディアによる「身体性の拡張」でした。森, 原田, 森岡氏による視覚・聴覚・触覚の拡張は非常に効果的に子どもたちの感覚に働きかけていましたが、それ以上にワークショップを盛り上げたのは苧宿氏のローテクの蛍光絵の具とブラックライトでした。それは、ワークショップに関わるものと人, 人と人などのファシリテーション活動の重要性を示していました。

私たちは、メディアをキーワードに造形美術教育に係わる教育を再構築しようという大それたテーマを掲げています。その方法論としてワークショップを今検討中です。ワークショップは楽しい反面、やりっ放しという批判があります。多くの美術館等で行われているものは、アーティストによるその場限りのもので評価

まではできにくいのが現状でしょう。私たちは、文字情報以前にイメージが外的世界と内的世界との内容の意味づけを行ってきたことに注目し、イメージ、すなわち感性に基づく情報活動を用い、色や形になるずっと前の段階の造形美術教育の発生のかすかな響きを教育全体の基礎として提案したいという思いを持っています。それは、メディアをキーワードに教育や学習のプロセス主義を明らかにし、アフォーダンス(ギブソン, J)のように(学習)世界をシームレスに受容できるシステムを作っていくことともいえます。



荻宿：Tシャツで話そう ねえ@あさひ



佐藤：あの時あの場所いろ図鑑@たまひ

* * *

科学研究費補助金

＜研究成果公開促進費＞による出版紹介
『基礎造形教育におけるデッサンの目的と意義－絵画作品の幾何学的実証を通して－』
多賀出版

蝦名 敦子(弘前大学)

感性を磨くとはどういうことなのか。そのために造形教育の基礎と見なされるデッサンの目的と意義は何なのか。私はこのような問題意識をもってきた。一方で、中国の明末清初の禅僧画家石濤が、作画のあり方について一本の線の意味から原初的に問い直した『画語録』に興味を抱き、両者をオーバーラップさせながら、その共通項を模索してきた。その結果、調和と均衡の感覚という概念が抽出されたが、それを用いて『画語録』を分析しここに見えてきたのが、デッサンの目的と意義である。本書では西洋のデッサンという概念のみならず、日本が多大な影響を受けてきた東洋画も視野に入れながら、それを造形教育の基礎として再検討した。

具体的には、デッサンの訓練や修練を通して、美の本質の一つとして均衡・調和の感覚が養われるという理論的仮説を立て、科学的とくに幾何学的手法を用いることによって、その検証を試みたのである。画家の磨かれた感性による作画は、西洋で科学的に追究されてきた、美的な一つの基準としての黄金比を充足する。その証明をもって、人間が有している造形的な感性を磨くという意味を問うた。

実証に適用したのが、クライス・ジェオメトリーである。西洋、東洋を問わずデッサン力によって裏付けられた画家の絵画作品の中には、美的なものとしての均衡・調和が備わっていることを、コンピュー

タを活用することによって証明した。また、石濤著『画語録』は造形の根源についての覚醒を促した書物だが、上記概念を切り口として解釈し直した。その知見を手がかりとして、現代におけるデッサンの考え方を根源的に見直そうとしたのである。

その考察の過程で、石濤の「用を神に見し、用を人に蔵す」という「一画」— 一本の線のはたらきを掌握することと、神授比例法と称された黄金比は、造形バランスという概念を共有していると洞察された。人間は自然の最も高度な造形物である。その人間が自然を見て描き、そこに内在する秩序を感受する行為によって、自己の感覚を造形的に洗練していくことが可能となる。“神”とまで象徴される秩序感、バランス感覚がそうした訓練によって自ずと磨かれていく、というところに共通点が見いだされた。

さて学校の教育現場においては、限られた授業時間で指導すべき内容も多岐にわたり、習得に時間と、訓練や忍耐を要するデッサンが軽視されやすい傾向にある。本書は今日要請されている基礎・基本の徹底に際し、造形教育の基礎としてデッサンを正当に位置づけ、その意義を改めて問い直した。デッサンを通し、見て描くという行為の中で何が習得され、基礎教育として何が大事となるのかについて、より明瞭にしたつもりである。

理論的仮説の検証は本書で、美という感性の論理や問題に黄金比を適用することで行ったのだが、それは証明の一部との批判も被るかもしれない。しかしながら、誰もが表現者になりうる今日、修練された作画とはどこが違うのか、理論的根拠を示して、より明確にしなければならぬという思いがかねてからあった。

また本書では、最初に黄金比を使って構図をとるとの意味でそれを適用したのではなく、あくまでも主眼は、画家の錬磨された一点一画には、そのような規範を充足する美的なバランス感覚が内包され

ている、ということの証明にあった。そうであればこそ、そのような感性を磨くこと自体がデッサンの目的となり、またそこに意義があるとした。そうした修練、研鑽は尊い行為ではないだろうか。それが今日軽んじられていると感じてならない。このような観点から本書は刊行に至った。さらにご指導、ご批判を受けながら考察を深めていきたいと思う。

* * *

美術教育史研究部会報告
：岡山での研究会
テーマ「学校における美術鑑賞教育と
その歴史」

赤木里香子(岡山大学)

昨年度の美術教育史研究部会は、学会広島大会前々日の3月18日(木)17時半より、岡山国際交流センター3階研修室にて「学校における美術鑑賞教育とその歴史」をテーマに研究会を開催致しました。部会員だけでなく地元の教員、美術館学芸員・ボランティア、学生・院生を含め38名にご参加いただき、コーディネイターである赤木のほか、新井哲夫氏(群馬大学)、金子一夫氏(茨城大学)の研究発表の後、21時前まで熱心な全体討議が展開されました。

まず赤木が、美術科教育は《見る力》をどのように捉えてきたか戦前を中心に発表し、新井氏が戦後の学習指導要領における鑑賞教育の位置づけを資料によって詳細に跡付けられ、最後に金子氏が明治末期から昭和20年代の鑑賞教育関連資料を紹介されたうえで、これからの学校教

育における鑑賞教育の方法論を提示されました。

全体討議では、明治期の臨画教育に対する再評価は可能か、戦後に一時は出現した鑑賞教材が消滅したのはなぜか、最近の鑑賞教育方法に戦前の教養主義とは異なる側面があるとすれば、それはどのような背景からもたらされたのか、といった点が論議されました。

なお研究会では、「長瀬小想画を語る会」の寒河江文雄氏からお送りいただいた『想画だより』第3号、熊本高工氏の著書『児童画の歴史』の紹介、茨城大学学生・院生による文書発表など、配布物も盛りだくさんでした。研究会終了後の懇親会にも20名以上の参加者があり、交流を深めることができました。

さらに翌19日(金)午前9時から、岡山県立美術館のご協力を得て同館収蔵資料の見学会を開催し、岡山県師範や大阪府師範学校で教鞭をとった洋画家・松原三五郎の修行時代のスケッチブックや、勤務の傍ら開いた画塾・天彩学舎の様子を記録した写真帖などを収蔵庫から出して見せていただきました。貴重な資料に直に触れるひとときは、本部会員にとって何ものにも代えがたいといえるでしょう。

お忙しい中、ご協力ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げますとともに、今後とも美術教育史研究部会へのご支援をお願い致します。どうもありがとうございました。



研究会の様子

* * *

■新入会員の紹介■

高橋光明 (山梨県八代町境川村中学校組合立浅川中学校)

加暁舟 (佐賀大学)

後藤楯比古 (鎌倉市立御成中学校)

中村光絵 (社会福祉法人めぐみ保育園)

今井真理 (名古屋短期大学)

鳥越亜矢 (山陽学園短期大学)

丹進 (山陽学園短期大学)

井本英里 (和歌山県立海南高等学校)

田中勝博 (目白大学人間社会学部心理カウンセリング学科)

上浦千津子 (兵庫教育大学連合大学院)

小林晴美 (岩井市立岩井第一小学校)

有田洋子 (鳴門教育大学大学院)

宮城島喜弘 (愛知教育大学大学院)

小野文子 (信州大学)

仲田耕三 (徳島県立近代美術館)

■事務局から■

前52号で新入会員としてご紹介した武田伸吾さんは武田信吾さんの誤りです。お詫びして訂正させていただきます。

■通信係退任にあたって■

通信42号から今号まで、編集と印刷等実務を担当いたしました。宇田先生と上山先生には本当にお世話になりました。どなたよりも早く学会通信を読むことができた3年間でした。

ありがとうございました。(相田)

通信第30号から53号まで、6年間担当しました。とはいえ、メディア機器の使い手である新井、相田、上山、3氏のお陰で、ここまできたという次第です。編集係として学んだことを是非とも今後の活動に活かしていきたいと思っております。ありがとうございました。(宇田)

* * *